

保健師の役割や保健指導のあり方学ぶ

平成 30 年度京都市町村保健師協議会総会・研修会



京都市町村保健師協議会の平成 30 年度総会・研修会が5月8、9日の二日間にわたって本会で開かれ、85人の保健師が参加した。研修会では三講演が催され、自治体保健師としての役割や保健指導のあり方など実践的な内容について学んだ。

まず総会で、上村弘美会長（久御山町）が「今回、沖縄県から端を発した麻しん流行については各市町村の衛生部門で対応に追われていることと思います。このような中、市町村の保健師は虐待予防対策を含めた子育て支援事業、日々の健康増進事業として重症化予防の取り組みも一体的に進めていかなければなりません。そのためにも、ライフステージごとに分散配置された市町村保健師に協働・連動した活動が求められています」と話し、「今年度、京都で第41回近畿地区市町村保健師研修会の開催を行うにあたり、『地域に還る』というテーマを掲げ、公衆衛生活動の基盤に振り返れる内容で研修会を企画しました。総会と二日間にわたる研修会を有意義なものにしていただきました

い」と挨拶した。

続いて同協議会顧問で立命館大学の松田亮三教授、京都府健康福祉部の千葉圭子総括保健師長が挨拶した後、議案審議に入り、平成 29 年度事業報告、歳入歳出決算報告、30 年度事業計画案、歳入歳出予算案を原案どおり承認した。また役員改選があり、副会長に大森敦子氏（向日市）を新たに選んだ。この後、保健師に今春新規採用された職員ら新会員 24 人が紹介され、各自が保健師としての抱負を述べた。

午後からの研修会では、花ノ木医療福祉センターの弓削マリ子氏（小児科医）が「集団が苦手な子への支援を考える～子どもの行動への理解が支援のスタート～」と題して講演した。

9日の研修会では、京田辺市こども政策監（輝くこども未来室長）の西川幸子氏が「地域包括ケア時代の保健師に期待すること」、オフィスセレンディピティ代表の鱸伸子氏が「コーチングで保健指導を楽しくする！～相手が自ら考え決断し、行動するように促す～」と題して講演した。